

盾の克服を本書がみごとになしとげている理由のひとつは、著者の力量もさることながら、相互行為の人類学という分野の性格にもよるのかもしれない。著者によれば、「地に足の着いた事例の丹念な分析は、凡百の抽象的な比較や考察を凌駕するというのが人類学のもっとも基本的な教えの一つである」(p. ii) という。思えば、1990年代に近衛ロンドの大学院生たちがよく口にしていた言葉のひとつに、「神は細部に宿る」という聖書の箴言があった。細部に徹底的にこだわることで普遍にいたろうとする学問的営為の力強さが、本書の随所にも伝わっている。

引用文献

- 飯田 卓. 2010. 「ブリコラージュ実践の共同体—マダガスカル、ヴェズ漁村におけるグローバルなフローの流用」『文化人類学』75(1): 60-80.
- 木村大治. 2018. 『見知らぬものと出会う—ファースト・コンタクトの人類学』東京大学出版会.
- 谷 泰編. 1987. 『社会的相互行為の研究』京都大学人文科学研究所.

川田牧人・白川千尋・関 一敏編. 『呪者の肖像』臨川書店, 2019年, 292 p.

村津 蘭*

人はどのようにして呪術を学び、呪者となっていくのか。こうした疑問をもとに、日本、東南アジア、アフリカ、太平洋諸島から中世ヨーロッパに渡る幅広いフィールドにお

いて、研究者たちがそれぞれに出会った呪者を描き出す。呪者とは、超越的な力を使い望ましい状況を得ようとする営みを行なう人、すなわち呪術を執り行なう人のことであるが、本書ではまず、その描かれる呪者の人物像に惹きつけられるだろう。不幸や鍛錬、或いは幻想的な旅の経験などを経て、目に見えない力と交渉する技術を身につけた呪者たちが、各章で人間味の溢れる存在として現れてくる。本書の終章において関一敏は「呪術者の肖像（阿部年晴）に焦点をしばって、『呪術世界に入る』ことと『半分のまじめさ』（Mauss, 1904）にふれてみる必要」（p. 270）を説くが、本書は、時に胡散臭く時に献身的な呪者のふるまいや人間像を通して、まさに「呪術世界にふれる」ことができる本となっている。

それらの人物の魅力はむしろ、各執筆者のフィールドで培われた信頼関係によって引き出されているものだが、方法論的には「呪者を描く」という本書を通じてのテーマに支えられているといえる。呪術・宗教・科学というカテゴリーを考えた際、誰でもが結果を再現し得るとされる「科学」と比して、「呪術」は呪者自身の個人的資質や技術に基づいている。本書の表現でいうと、科学は離床度が高く、呪術は「離床度（＝代替可能性）」(p. 271) が低い。すなわち、呪者個人に焦点をあてることによってこそ、人格と呪術的な効果の関係が掘り下げられ、呪術が成立し再生産される際の社会的合意とその性質が明らかになることが期待される。それによって、「呪術とはなにか」という根源的な問い

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

にせまろうというのが、本書の目的である。

本書は、序、1～11章、終章という構成をとっているが、各章を紹介するには紙幅が足りないため、序文で示された問題意識と結びつける形で幾つかの章を紹介していきたい。

まず、人が呪者となる過程に焦点をあてたものがある。フィリピン・ビサヤ地方のメレコと呼ばれる2人の呪者の形成を追った川田牧人（第2章 鍛錬と天賦—呪者になるためのふたつの経路）は、呪者には自発的な動機から呪者になろうと努力する「鍛錬」型と先天的に霊的な資質がある「天賦」型があるとする。しかし、両者は見かけ程乖離したのではなく、呪者の肖像はその2つの要素が「入れ子のように互いに組み合わせあって」（p. 57）成立していると論じる。そのような呪者の形成過程に対して、ヴァヌアツ・トンゴア島の治療師について論じた白川千尋（第9章 治療師としてのふさわしさ—ヴァヌアツ・トンゴア島の伝統医療と担い手の関係）が目にするのは、呪者の知識に対する「受動性」である。白川の事例では、呪者は自ら知識を得るだけでなく、夢見を通して「ナエタタム」と呼ばれる超自然的な存在に治療方法を授けられる。本書では、呪術的な知識は呪者と密接に関わっているため離床度が低いという論に沿っているが、それは知識そのものの性格だけによるものではない。むしろ「知識を実行性あるものにする力」との関連で論じられるべきではないかという見解を白川は提起する。

本書の複数の章で、治療師の資質として「献身的であること」や「金儲けを目的とし

ないこと」があげられているが、その理由を「公共性」という視点から論じたのが梅屋潔（第11章 〈呪力〉の「公共性」）である。新潟県佐渡島の宗教的職能者と、ウガンダの聖霊派キリスト教の〈霊媒〉たちの事例をクロスオーバーさせながら、梅屋は彼らが呪者となった道筋を辿る。その過程に共通するのは、世界の多くの地域における成巫過程と同様、数々の不幸の経験である。梅屋はこの個人的で代替不能の経験が、呪者になることによって合理化されている点に注目する。すなわち、呪者は、コミュニティによって周縁化されかねない不幸の経験を、「神に選ばれた身であるから」という日常の論理ではない方法で、当事者やコミュニティに納得させるのである。そして恐らくその過程を経ているために、それによって得た力は「公共性」を帯びるのである。この議論は、巫病のプロセスを「共同体の脅威になり得る個別のオンリーワンの能力を、〈コモンズ〉として承認させるプロセスとして」（p. 259）理解しうる可能性を開いている。

一方で、積極的に金銭の追求を行なう呪者もいる。近藤英俊（第8章 冒険する呪者たち—ナイジェリア都市部呪医の実践から）が論じるのは、ナイジェリアの都市カドゥナにおける呪医の「冒険性」である。この複数の文化が混じり合う都市には、金銭的利益に高い関心をもつ呪者が多く、呪者たちは常に自分の評判を高めるため「本物」の呪術を探求している。自らがイカサマ呪者でも、どこかに「本物」の呪術があると考えた姿勢は、世界の多くの呪術師に共通する。近藤はこの現

象を、呪術が可視的な実践と不可視の力という二重性からなる点に着目して説明する。見えるものの裏に、見えない真実があるという相貌と、やってみなければわからないという不可知性が、呪者を冒険的探究へと動機づけている。そして、その本物の探究が実は「偽物」の呪術を作り出しているのだと近藤は論じる。

呪者が本物かイカサマかという問題は、「イカサマ僧侶」に対する言説が宗教空間の一部となっているタイの状況を描いた津村文彦（第1章 イカサマ呪者とホンモノの呪術—東北タイのバラモン隠者リシ）も論じている。津村もまた、呪者をイカサマとして否定することが、逆に本物の呪術的知識をどこかに存在させることにつながっている点を指摘する。津村は呪術やトリックを見る人々の経験に注目し、それが「成功」することを支えているのは、呪術への希望によって人々が「見えない部分を雑多に想像力で補って理解するような世界の関わり方」（p. 37）をしているからだ論じている。

呪者を取り巻く人々に対する説得力の問題は、飯田淳子（第6章 力と感性—北タイにおける二人の呪者）も共有する。飯田はゴッフマンや関を引きながら、呪者が呪術的实践によってどのようにオーディエンスを説得し、物語を共同で構築しているのかに注目する。その説得のあり方は、飯田が例に出す2人の呪者によって対照的に示される。ひとりには宗教という制度的基盤をもった、伝統医療の知識をもつ呪者であり、もう一方は文字よりも感性に頼る部分が多い呪者である。後

者の方が「離床度」が低い呪者であるといえるが、それは後者の呪者がもつのは、主に身体感覚を通して獲得される〈いま・ここ〉に根差した知識で、文字が介在していないからである。飯田は、呪術には文字や呪文のもつ「説得力」と同様に、身体に根差した感性のもつ「説得力」があるのではないかという視点を提起する。そして、それぞれの呪者がそれぞれの説得力を用いながら社会的合意に基づくパフォーマンスを遂行することによって、呪者自身もその物語の中を生きるようになるのだと論じる。

また、呪術が呪者本人と結びつきが強く、離床度が低いとする本書の枠組みについて、その結びつきを決定するのは呪者の属性というよりも、社会的合意であるという論点が、片岡樹（第10章 妖術師の肖像—タイ山地民ラフにおける呪術観念の離床をめぐる）によって提起されている。特に、タイ山地民ラフにおいて「妖術師」と呼ばれる無意識的に人を害するとされる存在は、本人が名乗る訳ではなく、周囲によって決められる傾向が非常に強いものである。現在呪術論は妖術も含んでいるが、離床度という基準で呪術論を発展させていくことを考えると、「呪術」というくり以外の軸を設定する必要があるのではないかと片岡は提起する。

以上、本書の幾つかの章について簡単に紹介してきたが、これだけで既に「呪者を描く」というだけに留まらない、多くの論点が提起されていることが理解されるだろう。それぞれの呪者の丁寧な描写だけではなく、飯田による「身の入れ方による説得性」という

考え方や、梅屋の呪者を「コモンズ」とみなすという提起など、呪術研究に新たな視点を与える重要な指摘が多くなされている。個々の呪者のそれぞれについて展開される議論を追いながら、その差異と共通点について考えるのは、実にエキサイティングな作業である。

しかし欲をいえば、各執筆者が議論した内容について、執筆陣で議論して描かれた総合的な呪者の素描をみたかったという思いもある。各々の章が描き出した呪者は、それぞれ地域もバックグラウンドも異なるフィールドに基づいているのに、明らかに多くの共通点がみられたからである。関が呪者の肖像を描くことで目指したのも、「一般化しうることは何か」(p. 270)を模索することであった。このことを鑑みても、各章における「呪者の肖像」をもとに何が普遍で個別かという点について議論するのは、大変興味深い試みになるのではないだろうか。

また、本書は科学・宗教・呪術というカテゴリーの中で呪術の「離床度」をみるという議論をしているが、多くの執筆者が描く呪者の実践において、宗教と呪術は分離することが困難なくらい入り混じっているようにみえる。今後の展開においては、たとえば飯田が第 6 章で提起した、制度的基盤や言語、或いは感性への依存性という軸で実践を区切ってみるなど、科学・宗教・呪術というカテゴリーではなく、本書で提起された観点から分析枠組みを見直すことも可能であるように思う。

いずれにしても、「このような試みはいま

だ緒に就いたばかり」(p. 11)と語られているので、今後、呪者についての議論は更に発展していくものであると考える。次はどのような呪者に出会うことができるのだろうか。今から楽しみである。

長津一史. 『国境を生きる—マレーシア・サバ州、海サマの動態的民族誌』木犀社、2019年、481 p.

足立真理*

国境とは、そこに生きる人々にとってどのような場所であろうか。本書は、この魅力的な問いに対し、マレーシア・サバ州とフィリピンの国境を生きる海民＝海サマ（バジャウ）の視点から国境の意味を探ることを試みた民族誌である。

民族誌としての厚い記述もさることながら、フィールドワークから 20 年の歳月をかけて構想された本書は、①民族の生成と再編、②開発過程と社会の再編、③イスラーム化と宗教実践の変容という 3 つの課題にこたえるべく、三部構成で編まれている。1997-1999 年にスル諸島のカッロン村で地道に収集したフィールドワークのデータを用いて、各部で議論を展開し、国境社会における人々の「生の文脈」を体系的に描き出した大著である。まず、本書の内容について紹介し、次にその意義、議論を整理する。

本書は序結と第 1 章を除いた 10 章を大き

* 京都大学東南アジア地域研究研究所